Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.118
2013年12月11日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　祝宴の夜／画・甲斐大策

シギ堰取水口消失、カマ第2堰全壊	中村　哲
受験日にカランコロンと	藤井健二
焼鳥屋の夜から30年が過ぎて	沢田裕子
治安も平和もない中での30年にわたる活動に感謝	モハマッド・アーベット
火野葦平と中村勉さん	玉井史太郎
家族を大事にするスタッフたち	村井光義
◉カラー特集　ペシャワール会30周年特集　第2回　干ばつ顕在化、水事業始まる	

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

シギ堰取水口消失、カマ第二堰全壊

――恐怖と重圧の中で黙々と作業。窮乏は依然として進行

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表　中村　哲

過去最大の洪水

皆さん、お元気でしょうか。

当地は寒くなり、河の水位が急に落ちました。つい最近まで洪水の濁流と格闘していたのに、今度は渇水との戦いです。

しかし、河川工事は今が黄金のタイミングです。例年のことながら、十一月になって、俄かにめまぐるしい日々が続いています。今年は過去最大の洪水に見舞われ、その後始末と共に、新たな取水堰の完成をめざし、多忙な毎日です。

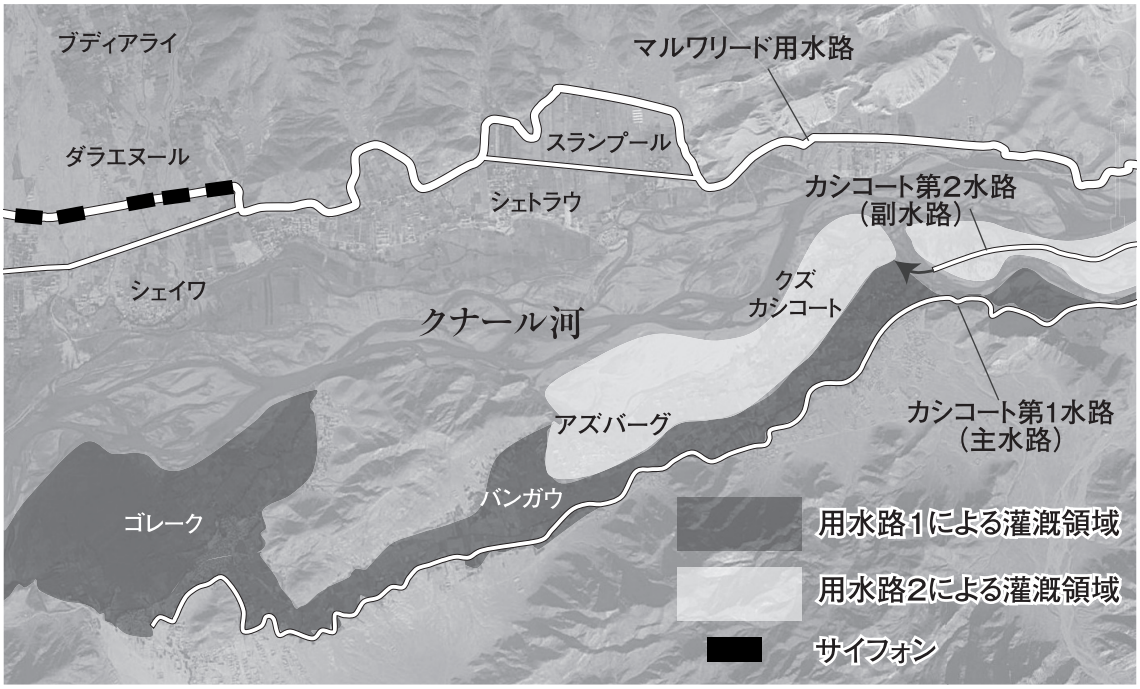
洪水の爪痕が水位の低下と共に明らかになり、さすがに戦慄しました。今冬予定したシギ堰取水口が基礎地盤もろとも消え、力を注いできたカマ第二堰が全壊に近い打撃を受けました（会報一一六号八頁参照）。一時は住民が不穏、村落同士の水争いが頻発し、これを鎮めるためにも、PMSは復旧作業に全力を傾けました。

カマ郡は今や三〇万人以上を擁する東部最大の穀倉地帯、修復に全力を投入しました。シギ地方は気の毒で、取水口から流域約五kmにわたり、耕地幅数百メートルが河の藻屑と消えました。従って、今冬の「シギ堰取水口建設」の予定はなくなり、住民の動揺は大変なものでした。でも良くしたもので、マルワリード用水路の延長（シギ分水路・約二km）が完成しており、これが命綱となりました。用水路全体の保全と管理を強化して全開で送水、何とか安定灌漑を維持しています。現在、小麦の播種は、以前よりもスムースに全域で行われ、住民は胸をなでおろしています。

三十数万農民の自活保障

こうして、現地と日本側の並々ならぬ協力で、少しずつ回復してきています。十一月中にはカマ堰が二カ月の難工事の末に復旧、マルワリード＝カシコート連続堰は決壊部分を修復・強化し、今冬中の完成が確実となりました。この連続堰が、「緑の大地計画」の大きな山だと再々述べてきた通りです。カシコート側だけでなく、マルワリード側の安定灌漑が実現すれば、渇水の恐怖から免れるからです。一昨年十月か

用水路を造るのは簡単ではないが、維持はもっと努力が要ると力説（定例浚渫行事。2013年10月）



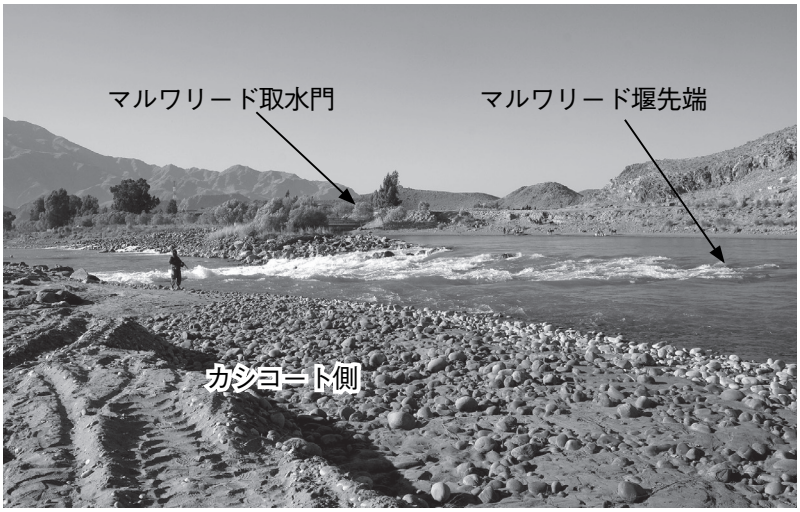
クズカシコート灌漑　既存水路との連結ルート

らの気の長い努力で、全力が注がれてきました。成れば、両岸約五千ヘクタール以上、三十数万農民の自活が保障されます。シギ地方が同用水路に全面依存するに及び、重要性を更に帯びています。

川との折合い

十一月下旬、同連続堰の河道整備が進み、最後の難所に差しかかりました。崩壊したマルワリード堰の先端です。詳細は別に報告しますが、その時の喜びと興奮は、例えようのないものでした。幅五〇メートルの河道の直下が滝壺のようにえぐれ、年々崩壊が進んでいました。ここを失えば、心血を注いだ用水路全体が干上がり、再沙漠化する――これが長年の恐怖と重圧でありました。それが今、各河道の流量を調整し、カシコート側からの交通路を確保、悠々と巨礫を大量輸送、抜本的な改修ができる。当面の不安にとどめを刺し、河との折り合いがつきます。

冬の清流が落差三メートルの急流を作り、巨礫に激突して真っ白な水しぶきを上げる。それは暴れる巨大な白鯨のようです。河を宥め、人々に安堵をもたらす。こ



年々崩壊が進んでいたマルワリード堰先端

カシコート主幹水路延長計画

カシコートは東部アフガンでも最貧困地帯のひとつで、人口約 5 万人以上、耕地 2500 ヘクタールを有する。「陸の孤島」と呼べるところで、放置されてきた農村地帯である。

2012 年に始まった取水設備の建設（取水堰、主幹水路 1.7㎞）は、難工事の末、一応の終止符が打たれようとしている。しかし、取水が可能になっても、既存水路の送水量が小さく、必要量を送水できないでいる。

連続堰・主幹水路の建設は、ペシャワール会の多大の努力による河道変更工事を基礎に、「ＪＩＣＡ共同事業」として成りつつあるが、既存水路の流量を増さねば、全域の安定灌漑は実現しない。現在、帰郷難民で人口が爆発的に増えている。

ＰＭＳとしては、既存水路の改造は多大の時間と労力がかかると見ている。しかし、計画が実現すれば、稲作を含む集約的な農業と耕地拡大を可能にし、小麦と野菜の作付けしかできなかった地域で、完全自給と更に豊かな生産を期待できる。

付言すれば、同地域は兵員の供給地帯である。水欠乏と洪水で田畑が荒れて農業ができず、住民の大半が難民化し、残った者も「出稼ぎ傭兵」として、警察官、国軍兵士、反政府側の兵員を生み出し続けてきた。吾々は、このような状態の解消をめざして「緑の大地計画」を始めたいきさつを思うと、カシコートは計画上の重要目標として、努力を注ぐべきかと思われる。

他方で干ばつ・洪水は収まる兆しなく、不安定な水供給はアフガン農村を壊滅的な状態に追い込もうとしている。だが、適切な手段で安定灌漑を実現すれば農村復興が可能であることを吾々は実証してきた。同地域の復興は、最善の実例を加えるものと思われる。

工事の概要

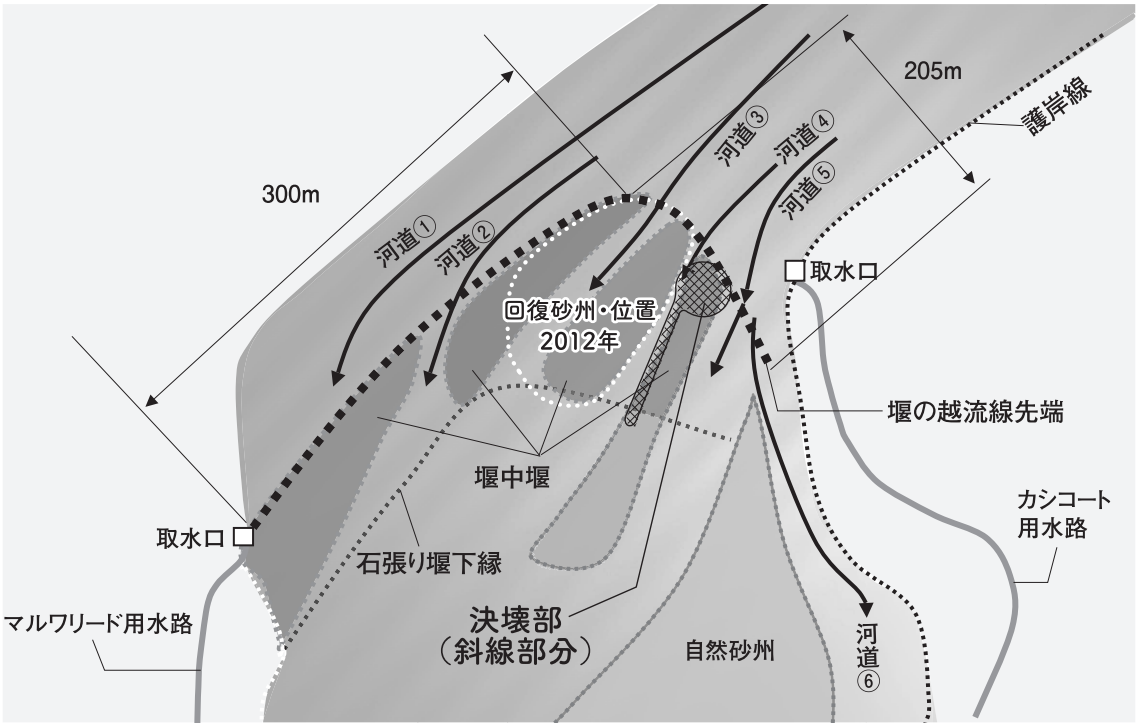
［工事の場所］ナンガラハル州シェイワ郡クズカシコート
［期間］ 2013 年 12 月から 2019 年 11 月
［工事内容］既存水路 9.5㎞を全面改修、鉄砲水通過地点のサイフォン、架橋などを含む。送水可能量を 1.2㎥ / 秒から 4.0㎥ / 秒に増加、クズクナール全域で安定灌漑を実現、耕地拡大や水稲栽培を可能にする。
［潤う村落・人口と面積］クズクナール村、アズバーグ村、バンガウ村、ゴレーク村などカシコート下流域、計約 2000 ヘクタール、現在約 5 万人以上が居住。
［設計および施工者］ＰＭＳ（平和医療団・日本）

シギ地方の命綱となった分水路

れほどの緊迫は最近あまりないことです。

畏れるのは天と良心のみ

現場は気を引き締め、ジャララバード事務所は、ジア先生を筆頭に現場を頻繁に訪れて激励、悪路をものともせず、遅滞なく資機材を送ります。カシコート自治会は、対岸の戦闘地に神経をとがらせ、「作業地に着弾すればカシコート三〇万家族を敵に



マルワリード＝カシコート連続堰と河道の最終位置

6 月から洪水が頻発し決壊した既存用水路。ナンガラハル州南部農村にとって壊滅的打撃となった（2013 年 8 月）

回す」と檄をとばし、両軍の戦闘員に圧力をかけます（実際は数千家族ですが、多数を「三〇万」と表現します。また、貧しい寒村は、両軍に出稼ぎ傭兵を送って生計を立てざるを得ない事情があります。戦の圧倒的犠牲は、貧困にあえぐ者同士が戦わされることによります。「故郷で耕して生きられるなら、兵隊や警官にはならない。」みな、そう言います）。

この事情で、天と良心以外に、何を畏れるものがありましょう。数百名の作業員は迷いなく、みな心をひとつに、黙々と作業が進められています。

連続堰完成後は、カシコート全域（二七〇〇ヘクタール）の安定灌漑を目指し、PMSは九・五kmの主幹水路延長と拡幅を決定、去る十一月二十日、PMS＝ペシャワール会の仕事として、六年がかりで実施することが住民との間で話し合われました。

窮乏は依然として進行

最近、日本の皆さんから「用水路ができて緑がよみがえり、多くの人が帰農して良かったですね。まだやることがあるのですか」と、しばしば尋ねられます。

実はアフガン全土で農地の乾燥化と農村の窮乏は、依然として進行しています。政治的混乱も、収まる気配がありません。報道が消えただけなのです。

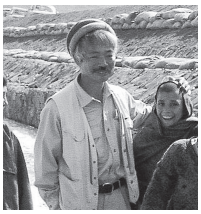
PMSは現在、マルワリード用水路建設に一応の区切りをつけ、新たな挑戦を続けており、東部の穀倉地帯・ナンガラハル州北部三郡（六五万人）全体の安定灌漑をめざしています。取水堰の新設や改修がその最大のカギです。この数年、大半の時間を川辺で費やしているのはこのためで、貧しい農村にとって、近年の気候変化に対応して生き延びる道は、これ以外に考えられないからです。

確かに政情は絶望的で、ニュースを追う限りは、元気の出ないことばかりです。アフガンと言わず、日本国内、いや身の回りでもそうでしょう。でも、現地に居て確かなことは、地味とも思われがちな相互の思いやりこそが、辛うじて世界の破局を食い止めているのだと思い当たります。明日の糧も分からぬ人々にとって、無数の議論より、一片のパンを与える行為の方が、どれだけ温かい励みになるか計り知れません。

私たちの活動は、更に規模を広げながら、営々と続けられています。みなさんの心ある支えで三〇年を経過、かくも長く希望を分かち合えたことに感謝し、今後も更に大きな実りと平和を目指して、変わらぬお支えを切にお願い申し上げます。

良いクリスマスと新年をお迎えください。

二〇一三年十二月　ジャララバードにて



中村　哲…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来二九年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヵ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約五万五千人（二〇一二年度）。

◎ペシャワール会発足30周年記念特集　第二回

受験日にカランコロンと

香住ヶ丘バプテスト教会　名誉牧師
藤井健二

中村哲君との最初の出会いは、私が駆け出しの牧師であり、てっちゃん（ここでは敢えててっちゃんと呼ばせていただきます）がまだ西南学院中学生だった五十数年前に遡ります。

ひとりの宣教師に伴われて数人の中学生が、うちの礼拝にやってきた、その中のひとりが彼でした。そして、一九六一年のクリスマス礼拝で新しい教会堂においての、初めてのバプテスマ（洗礼）を受けたクリスチャンであります。ちなみに、もうひとりは女子中学生で、今も牧師夫人として尊い働きをしておられます。この日が、香住ヶ丘教会にも、新米牧師にとりましても、記念すべき喜びの日となりました。

さて、てっちゃんの少年時代の逸話をひとつご紹介しましょう。彼の大物ぶりがここにも窺えます。

ある日曜日の朝、いつものように家内が教会の前の道を掃除していると、てっちゃんが、カランコロンと下駄を鳴らして礼拝にやってきました。びっくりしたのは家内です。

その日は公立高校の受験日だったからです。そのことを伝えると持ってきた聖書を家内に預け、夜の礼拝に出直すと言い残して踵を返しました。

そんな彼が福岡高校に合格し、「次は九大文学部に進み、叔父貴（作家火野葦平氏）のような物書きにでもなるか」とよくふざけて話していたので「叔父さんの作品に『花と龍』があるが、君は『草と蛇』でも書くか」などと冗談言ったりしました。しかし、しばらくすると、「文学部に行かなくても、好きなら物書きにはなれると思うから、医学部に入り、医者となって医療の恩恵に浴さない場所で働きたい」と言うようになりました。

そこで私は折に触れ、当時ネパールで活躍しておられたクリスチャン医師であり、「髭のドクター」と呼ばれていた岩村昇先生のことや、聖書の中でイエスが語られた有名な「よきサマリヤ人の例え話」などを話したものです。

哲君は、礼拝の時だけでなく、しばしば牧師の住まいである牧師館にやってきました。そして、聖書以外、文学や芸術をはじめ、時事問題から政治に至るまで、感性豊かな彼との語り合いは時を忘れて続きました。

後年、彼がこれまでの働きの動機などについて尋ねられたとき「藤井先生にそそのかされました」と言っているのを知り「人聞きの悪いことを言うなよ」と苦笑したものの、悪い気はしませんでした。私との触れ合いが何かのヒントにでもなったとすれ

ペシャワール会理事会に出席の藤井牧師（右から２人目）

ば、これは私にとっても大きな喜びであり光栄なことです。

てっちゃんがクリスチャンになってすぐ、中高生の「ひいらぎ」という機関紙を作り、表紙に使う木版画を彫ったり、率先して原稿を書いていましたが、物書きになると言っただけあって心を打つ文を書いていました。

現在の多忙な日々の中でも、すばらしい著書を著しているのはさすがと思います。

このように、今までの尊い彼の働きと、少年時代の彼の思い出を重ね合わせ思うにつけても、「栴檀は双葉より芳し」ということわざが鮮やかに思い浮かびました。

と同時に、これまでいろいろな形でペシャワール会の働きに関わり力強くご支援くださった皆様に、彼を送り出した教会の牧師として厚く感謝申し上げます。

ペシャワール会の働きがますます用いられますように、真の平和が実現しますように祈りつつ拙いペンを置きます。

「平和を実現する者は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」

（新約聖書　マタイによる福音書5章9節）

焼鳥屋の夜から三〇年が過ぎて

ペシャワール会事務局（ニューヨーク在住）
沢田裕子

「焼鳥」にひかれて

私のペシャワール会との出会いは、一九八四年秋にさかのぼります。当時大名にあったYMCAの英語クラスや「アジアを考える会」に出入りしていた頃で、「今夜、近くパキスタンのペシャワールというところに出発するお医者さんの壮行会が大名の焼鳥屋であるよ」と誘われ、どちらかというと「焼鳥」にひかれて軽い気持ちで店に向かいました。野次馬同然の飛び入り参加の私は当然末席でしたが、そこから奥の和室で近しい支援者の方たちと談笑している中村先生の横顔が見えました。「あ～、あの方がこれからペシャワールというところに医療活動に向かう（いい意味で）奇特なお医者さまなのか～」と遠い世界の人のように思ったことを覚えています。ボランティアなんて言葉もまだ珍しい時代でした。

ところがその夜の壮行会に集まっておられる方たちの和やかな雰囲気に惹かれるものを感じて、翌週から水曜日の事務作業に参加するようになりました。しかしこれもまた「三年くらいで活動終了かな」ぐらいの軽い気持ちで。それがこうして三十年も深く関わって行くことになろうとは……。

自由でゆるやかな会

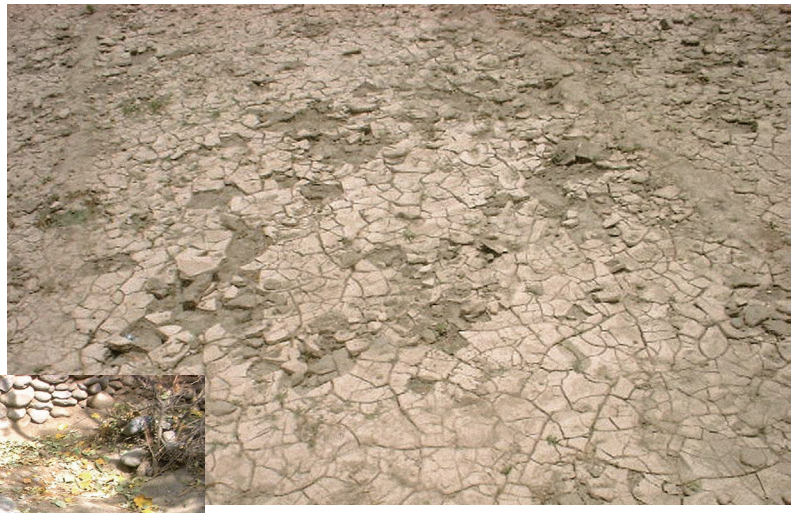
YMCAの一室を借りての週一回の集まりでは、会員の皆様から頂いた寄付の集計やお礼状書き、会報の作成・郵送、現地に送る備品の調達・梱包などなど、その時の必要に応じて出来る人が出来る作業をやっていました。メンバーも来れる週に来ると

（13ページに続く）

ペシャワール公営病院のハンセン病診療関係者達と沢田ワーカー

【カラー特集】ペシャワール会30周年特集

第2回　干ばつ顕在化、水事業始まる



上：干ばつに襲われたアフガニスタン東部の干上がった農地（2001 年）
左：伝統的な地下水路「カレーズ」も干上がっている（2001 年）

中村医師らＰＭＳチームによる干ばつ地域の調査。立ち枯れた木々が見える（2002 年２月）

2000 年、緊急対策として飲料用井戸の掘削を開始

材料の配合比が悪く、運搬時に割れるので井戸枠等はＰＭＳ独自で造ることにした

完成した飲料井戸。水汲みは子どもや女性の大切な仕事。2008 年までに 1600 カ所を掘削

井戸底に、鏡や金属の盆で光を送りながら作業を進めた

地域によっては直径５ｍもの灌漑用井戸を掘削（上は掘削前のひび割れた畑。左は 2001 年６月の掘削開始時）

上２枚：水が出始めた灌漑用井戸の底に降りる現地作業スタッフと、作業を見守る中村医師と目黒ワーカー
右：完成間近の灌漑用井戸。周囲の石は掘り出されたもの

アチン、ソルフロッド、ロダット地方でＰＭＳは飲料用井戸は掘ったが、灌漑事業までは至っていない。現在、この状態が全域に広がり、スピンガル山麓地帯の耕地は、ほぼ壊滅している

（8ページより続く）

いう感じで、時には友人を伴ってきたり、特にこれといった縛りも上下関係もない、至って自由でゆるやかな会でした。

会員情報は当時はまだパソコンなどない頃で、手書きのカードに記入してキャビネットに保管していましたが、二年ほどしてある大学でコンピュータを借りてデータ入力したのが現在の会員データベースの元になっています。

会報も当時は何人もで原稿を読み上げながら誤字脱字を直したり、ある号などはどうしてもスペースが埋まらず、とうとう中村先生の顔写真をどーんと丸まる一ページに掲載するなど手作り感に溢れていました。昼間の仕事を終えたメンバーが夕方から一人二人と集まり、事務作業が終わるのは夜の十時、十一時。それから近くの中華食堂で遅い夕食と、ビールで乾杯。ワイワイガヤガヤとお喋りが続き、大げさな議論をするでもなく、ただ中村先生を通して同じような思いを共有している仲間といるのがなんとも新鮮で心地よく、毎水曜の作業とその後の「お疲れさん」会がとても楽しみでした（楽しみすぎて深夜帰宅し、何度母にこっぴどく叱られたことか。年若い娘を夢中にさせた「ペシャワール」という無名の会にその頃の母は不信感で一杯だったようです）。亡くなられた当時の事務局長の佐藤雄二先生も遠い職場からの帰りによく寄ってくださり、私たちのよき相談相手になってくださいました。

ペシャワールに赴く

そうして三年が経ち、会の活動は終了するどころかハンセン病治療からサンダルワークショップ、移動診療、アフガン難民医療とさらに拡大、私自身も一九八九年ついに仕事を辞めてＪＡＭＳ（ジャパン・アフガン・メディカル・サービス）の事務ボランティアとしてペシャワールに赴くなど、気が付いたらペシャワール会にどっぷりと足をつっこんでいました。

ペシャワールはイスラム教色の濃い土地柄で、当時の病院スタッフは全員男性。同僚とはいえ気安く異性に接するような態度や女性一人での外出はご法度など日本での生活と大きく異なる面もあり、ストレスを感じることもありましたが、それでもＪＡＭＳ職員との心温まる交流や、夕方の英語クラス（私が先生でした）など、今も振り返ると懐かしい記憶が蘇ります。邑久（おく）光明園・臨床検査技師の故松本繁雄さんや後にワーカーとして何度も現地に赴かれた事務局の故林達男さんと検査室の若いスタッフとの微笑ましいやり取りに、通訳として同席した事も楽しい思い出です。またその頃中村先生は奥様と三人のお子さんと一緒に現地に住んでおられましたが、休みの日には退屈でしょうとよく自宅に呼んでくださり、奥様手作りの美味しい日本食をご馳走になりました。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払込用紙は、郵便局からコピーで届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼寄付をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

今夏の洪水で決壊寸前まで水が迫ったベスード第１水門（2013年８月）

ＪＡＭＳのアフガン人スタッフは彼ら自身も難民であり、戦乱で家族を亡くした人もいました。そんな彼らが故郷を懐かしんだりパキスタンでの不自由な暮らしに言及するのをいつも聞いていた私は彼らの境遇に深く同情し、ある日ちょっと過度に情緒的になって「彼らがあまりにも可哀相」と半分泣き声で中村先生に言ったことがありました。先生はそんな私に表情も変えず、静かな声で「本当にそう思うのなら、ずっと彼らを支援してあげることです」というようなことを仰いました。心のどこかで慰めの言葉を期待していた私はちょっとさみしく感じましたが、一時的な安っぽい同情心だけではだめなのだと後で思いました。

時々、もしかしたらあの時の先生の言葉が、私がペシャワール会にずっと関わり続けている理由なのかも知れないと思うことがあります。

翻訳作業で落ち着く

半年後ペシャワールから帰国した私は、その後も度々添乗通訳のような役回りで現地訪問団に同行したりしていましたが、一九九七年にニューヨークに移り住むことになりました。

福岡を離れ、会のことを途中で放り出したのはあまりに無責任だったのではないかとずっと気に病んでいましたが、それは二〇〇一年のニューヨーク同時テロに続く米国のアフガン空爆でピークに達しました。今自分が住んでいる国が、あのＪＡＭＳの皆が美しい故郷と懐かしんだアフガニスタンで、テロとは何の関係もない罪なき人々の頭上に爆弾を落としている。一方、日本ではこの事件を契機にペシャワール会への支援が急増して事務局が対応に追われている。それなのに私は……。いたたまれない気持ちでいた時に、事務局の松岡由香理さんから中村先生のためにアフガン関連の英語ニュースをインターネットで拾って翻訳したいが協力してくれないかと連絡を受け、二つ返事で引き受けました。その作業に没頭することで私はやっと心を落ち着かせることが出来ました。また松岡さんの呼びかけに応えて、更に各地から何人もの方が翻訳ボランティアとして協力を申し出てくださいました。その善意に深く感謝すると同時に、中村先生の命の尊さへの揺るがぬ信念に共鳴して行動を起こしてくださる人が日本に沢山いることを実感しました。十年続けたニュース翻訳は現在は規模を縮小しましたが、会報原稿などの翻訳作業とともに海を隔てた遠い場所から私がペシャワール会と繋がっていられるとても大切な仕事になりました。

私の人生を大きく変えることになったあの焼き鳥屋の夜から三〇年、関わるかたちは変わっても、ペシャワール会は私にとってずっと大切な存在であり続けてきました。ペシャワール会と出会ったおかげで私はこれまでに沢山の豊かな時間を過ごし、素晴らしい方たちとの出会いとかけがえのない経験を得ることが出来、人間的にもちょっと成長できたんじゃないかな、と思っています。

中村先生とペシャワール会の皆さんに、三〇年分の感謝を込めて。

治安も平和もない中での三〇年にわたる活動に感謝

ＰＭＳダラエヌール診療所看護師長
モハマッド・アーベット

二六年間勤務

私はアフガニスタン・パンジシェール郡アスタナ村出身で、アジムラーの息子モハマッド・アーベットと申します。私は、ピース・メディカル・サービス（ＰＭＳ）の看護師長として一九八七年から勤務しておりますが、ＰＭＳの三〇年におよぶ慈善活動についてご報告したいと思います。

アフガニスタンに共産主義政権が樹立された時、国中のアフガン人がロシア（旧ソ連）に対して蜂起し、そこからアフガン全土で戦乱そして壊滅的状況が始まりました。この戦争のために多くのアフガン人が殉死・負傷したり住居を破壊されたりしました。また職もなく治安情勢が悪化したりしたために外国、特にイランとパキスタンに避難せざるを得なくなるなどの深刻な問題に追い込まれた人々も出ました。

また外国に避難しても住む家がなかったり、社会的・経済的援助や医療ケアを受けられない人もいて、殊にヒンドゥークシュ山脈地域からパキスタンに避難してきた人々の中には、ハンセン病を患っている人もいました。ハンセン病は感染症ですが、早期診断・治療により手足等の変形や感染を防ぐためにも治療を必要としていました。

診療領域を拡大

一九八六年、ドクター中村を代表責任者、シャワリ・ワリザリフ医師を補佐としてＡＬＳ（アフガン・レプロシー・サービス）が創設されました。ＡＬＳは当時アフガン人・パキスタン人を問わずハンセン病の治療に当たっていました。しかし、アフガン難民の医療問題はハンセン病以外にも広く及んでいたのでその診療領域を徐々に拡大し、一九八九年には名称をＪＡＭＳ（ジャパン・アフガン・メディカルサービス）に変更、看護師や臨床検査技師の訓練も行って医療チームを向上させて行きました。そして一九九〇年からアフガニスタンとパキスタンに診療所を少しずつ増やして行き、計六カ所開設しました。これらの診療所では皆で業務に勤しみ、アフガン人・パキスタン人のハンセン病やマラリア患者などへ良質な診療を提供できたように思います。

そして一九九八年、パキスタンのペシャワール市内に基地病院が創設され、名称はＪＡＭＳからＰＭＳに変わりました。ここが私達の医療活動の中心となり、医療スタッフの数も徐々に増えていきました。ここでも看護・検査室業務の訓練を継続し、パキスタン人・アフガン人・日本人スタッフが仲良く協力して業務にあたりました。また医師の数も少しずつ増えていきました。

井戸掘の開始

二〇〇〇年になるとナンガラハル州ダラ

傷の治療中のアーベットと助手のアブドゥラ（ダラエヌール診療所）

エヌール渓谷などの地域や、数千人単位のアフガン人が往来するパキスタンとの国境の町トルハム周辺では干ばつによる深刻な水不足問題が発生したため、ＰＭＳはその力を結集しダラエヌール渓谷で飲料用の井戸掘りを始めました。その後、ジャララバードを拠点として、他の多くの地域（アチン、ソルフロッド、ロダット、トルハムなど）にも徐々にこの井戸事業を拡大して住民のために一六〇〇本もの井戸を掘り、干ばつに苦しむ人々に大きく貢献しました。

さらに、二〇〇一年は、ＰＭＳ事業の恩恵を受けられなかった（ＰＭＳは医療過疎地での活動が主であったため）、戦争によって失業・医療問題を抱えている人々を対象として、カーブル市やナンガラハル州で食料配給を実施して多大な援助を行いました。カーブル住民には食料配給に加え、各地区に診療所五カ所と管理センターの開設や女性の洋裁技術の訓練なども実施しました。ＰＭＳで数多くのミシンを購入して多くの戦争未亡人に提供するだけでなく、何より技術を習得して収入源に出来るという恩恵をもたらしました。

水路建設

その後、二〇〇三年にはナンガラハル州シェイワ郡で全長二五・五キロの水路建設を始めました。これによって何千もの村落が再建され干上がっていた土地が緑地になると同時に、失業していた延べ数十万もの人々が水路建設工事で雇用されました。

ダラエヌール渓谷では二〇〇二年からＰＭＳの日本人とアフガン人スタッフが農業プロジェクトを開始して住民に農業指導を実施しました。この活動を担当していた伊藤和也さんは熱意と優しさをもってこの仕事に当たっていましたが、二〇〇八年八月二六日、武装集団に誘拐されてしまいました。伊藤さんの働きとその仕事の成果に胸を打たれていたダラエヌール住民は、伊藤さんが誘拐されたと聞いて衝撃を受け何とか彼を救出しようと山に入って必死に捜索しましたが、無念な結果となりました。

この後もアフガニスタンとパキスタンの治安情勢は回復せず、ＰＭＳは医療活動を継続することが困難になり、アフガニスタン人もパキスタン人も診療していたペシャワールの基地病院は地元ＮＧＯへ譲渡され、日本人スタッフもドクター・サーブ中村と事務担当者を残し、全員が任務を解かれて帰国して行きました。現在は、ダラエヌールの診療所と灌漑事業と農業計画を継続しています。事務所はジャララバードに置いて、ここから活動への指示が出されています。二〇一一年にはナンガラハル州シェイワ郡に学校を建設。この素晴らしい建物では七〇〇人もの子供達が毎日勉強に勤しんでいます。

仕事に取り組む姿勢忘れません

ＰＭＳではシェイワ郡ガンベリ沙漠まで用水路を建設し農地が開拓されています。

またナンガラハル州各地では三〇年におよぶ戦乱と洪水の結果、決壊した川や崩壊した既存の灌漑用水路・堰の修復や堰・取水門の新設を実行、継続中です。今では住民の多くがこの恩恵を受けています。

＊

以上、簡単にＰＭＳがアフガニスタンの人々に提供してきた支援の一部をご紹介しました。

最後に、三〇年もの長きにわたり日本の皆様が私達に与えてくださった援助とご親切に対し、ＰＭＳとアフガニスタン国民に代わり本当に、本当に感謝申し上げます。

これまで医療だけでなく様々な分野で私達を助けて頂きました。またその間に教えて頂いた、仕事に取り組む姿勢は決して忘れることはありません。この度ＰＭＳの活動三〇周年にあたり、日本の皆様の善意、ご親切、細やかなお心遣いに心から感謝の言葉を申し上げます。アフガニスタンには平和も治安もありません。どうかこれからも私達を見放すことなくご支援頂けるよう、お願い申し上げます。

火野葦平と中村勉さん

火野葦平次男
葦平と河伯洞の会
玉井史太郎

ペシャワール会の三〇周年、ほんとうにおめでとうございます。

中村哲医師とそれを支えるペシャワール会の組織が、いま、世界で果たしている国際貢献の偉業については敬服のほかはありません。アフガニスタンに拡がる緑の大地が、その努力の跡を示しています。

中村医師のすばらしい活躍については多くの人たちが語っています。私は別のことを語ってみようと思います。

一九三〇（昭和五）年五月に若松市（現北九州市若松区）議会議員選挙が行われました。

当時、まだ石油などない時代でエネルギー源は全て石炭でした。その石炭は「黒いダイヤ」とか「産業のコメ」と大いにもてはやされていました。筑豊炭田から掘り出される石炭の多くが若松に運ばれ、ここから各地へ送りだされていました。若松は、その石炭荷役で大へん活気に溢れた街でした。多くの組が荷役に従事する、そのひとつが玉井金五郎を当主とする「玉井組」でした。

洞海湾での石炭利権を巡り、多くの「組」が競うなか、吉田磯吉一派の支配する「共働組」と、金五郎たちがそれに対抗する型で「連合組」を組織していました。

若松市議会でも、その対立が持ち込まれ、吉田一派が「民政党」にあらずんば人にあらずといわれるほどに市政を牛耳っていました。議員を勤める金五郎たちも、何とか議会内に作った「中立連盟」を強化したいと思っていました。一九三〇年の改選で、金五郎は「中立」勢力を強化するために、若い助っ人はいないかと、息子の玉井組若オヤジ勝則（葦平・私の父）に相談します。まだ被選挙権のない葦平は、当時、全協（全日本労働組合評議会）のオルグともいわれていた友人の中村勉を推せんし、葦平やその妹秀子など、元気のいい若者の多くが中

中村医師と玉井史太郎氏（左。2013年9月、福岡アジア文化賞授賞式で）

中村哲【最新刊】著者初の自伝！
自然と人間、人間と人間の根源的なかかわりを問い直す
天、共に在り
アフガニスタン三十年の闘い
四六判上製260ページ（内カラー4ページ）
定価：本体1600円＋税
第一部　出会いの記憶 1946～1985
第二部　命の水を求めて 1986～2001
第三部　緑の大地をつくる 2002～2008
第四部　沙漠に訪れた奇跡 2009～
NHK出版
〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41番1号
電話：03（3464）7311（代）
FAX：03（3780）3353

村勉当選をめざし選挙戦をたたかいました。

六月一日に開票された結果は、三〇名の議席中、十七名を公認した民政党が全員当選、玉井金五郎は一六〇票で二九位でかろうじて当選し中村勉は九三票を得ましたが、落選しました。

この選挙で、ただ一人、民政党非公認で立候補した舛添弥次郎は一五一票で次点落選となりました。後に若松に訪ねてきたご子息の舛添要一氏は、父親のポスターを持参。名前の右側にひらがなのルビ、そして左側には朝鮮文字のルビが有って、舛添さんは、当時は在日朝鮮人にも選挙権があったのではないかを調査にこられたのでした。

葦平著の「美しき地図」中に、戸畑の市議選で朝鮮人の立候補することが描かれているのを伝え、舛添さんは、後にそれを論文にして発表して話題になりました。

ともあれ、この選挙戦が縁となり、候補者の中村勉と、葦平妹の秀子が結婚することになり、すぐ生まれた女の子には共産党の一字を使って「共子（トモコ）」と名付けられました（当時の若者を巻き込んだ社会運動の中で、「共に戦う」という意味だったと中村は述懐しています）。

その中村夫妻には、その後なかなか子供が出来ず、十五年後に、ひょっこり生まれ出たのが中村哲さんなのでした。

◎ワーカー通信

家族を大事にするスタッフたち

PMS現地ワーカー　村井光義

ジャララバード事務所の会計で働き出して以来、毎月初めの木曜日の昼に食事会を開いている。

会計の二人（エンジニアハニフラとカビールジャン）と一緒にお金を出し合い、鶏や羊や魚など普段なかなか食べることのないご馳走を準備し、季節の果物やペプシと一緒に楽しむ。

以前は給料日（毎月最終木曜日）に催していたが、全職員に給与を手渡す作業を控え、落ち着いて食べることができなかった。また、現地には客人歓待の風習があるが、現場から早めに事務所に来た職員に振る舞えるほどの予算がなかった。

この食事会にいつも参加するメンバーは会計以外にはジア副院長。事務職員は他に五人いるが、半日で終わる木曜の昼食を家族と過ごすため早々と帰っていく。書類の作成や管理、役所での手続きなどでジア副院長を補佐し、残業も厭わないサブールジャンもその一人で、私たちの招待を辞し家路を急ぐ。

突然寒くなった一一月は魚料理にした。ここの魚料理は川魚の唐揚げに香辛料をかけたもので、食べると体が温（ぬく）もると言われ、寒い季節に好んで食べられる。食事を始めるとすぐにカビールジャンの電話が鳴った。家からかかってきたようだ。

PMS職員たち（村井ワーカー撮影）

ジア先生がすかさず言う。

「ミスタームライ、奥さんに頭が上がらないのは日本だけじゃないぞ、ここだって同じだ。」

慣習や文化の違いによる誤解を招くような発言を避けるため、職員と家庭の話をしないものの、ここで一番感じることは、皆が家族を大事にしていることだ。給与をもらって小麦や油、子どもの駄菓子を買いに行く後ろ姿、日頃当直で週に一度の帰宅時に、真っ白な服を身につけ、髪や髭をいつも以上に整える姿、時折見せる一家の大黒柱としての厳しい表情。そんな彼らを見ていると、ジア先生の言葉がただユーモアのある表現だっただけとは思えない。

以前、ムッラーハビブラが言っていた。

「外で働いているのは男でも家では女が働いている。家での仕事は家事育児などすごく大変なんだ。だから、夫婦は何でも等しく分けて、男は奥さんを大切にしなければいけない。」

食事会も終わりに近づいた。魚の唐揚げを食べ終わり、みんながブドウに手を伸ばし始めたとき、エンジニアハニフラの電話が鳴った。一同顔を見合わせ大笑いした。

2014年カレンダー

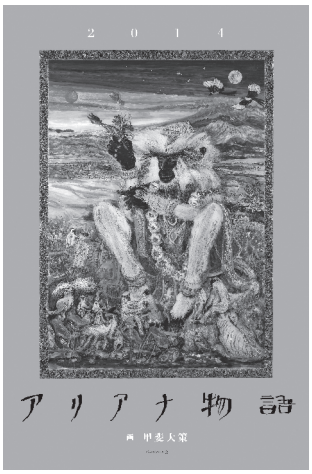
「アリアナ物語」

画・甲斐大策

販売中です

A2判変型（画・7点）

定価：1500円（税、送料込み）



今年も恒例のカレンダーを制作しました。同封のハガキでお早めにご注文ください。
（ご友人・知人の方々へのプレゼント発送も承ります）

サファル・バハエル！（良い旅を）――――16

カーブルの雪

甲斐大策

冬のカーブルは、乾いた風と凍餓の地だがこの年、陽光に消える朝霧が連日の曇天の下、低湿地の旧市街に日中も留っていた。

十二月二十五日夕刻降り始めた雪は、夜、大きな綿雪に変った。

「アイ・コルバン、その光をお前は識っているか。ヘルマンド川の葦で編んだ簾何層あれど幾重の壁あれど、石壁も透して我が胸に至り、心貫くその光……アイ・コルバン……アイ・アイ……。」

無秩序な泥屋の連らなりの最奥、一際大きい建物から、パクティア・パシュトゥンの、ダンダンと大太鼓が刻む[註1]強いリズムにアルモニアムとラバーブ[註2]の旋律をのせ、床屋三兄弟の歌と男達の手拍子や歓声が響く。

路地に流れる宴の賑いを、降る雪、地上の雪が吸い一帯に音はない。降りしきる雪と霧で空中に輪郭を失なった街灯の明りが、鬼火のように瞬く。

心臓発作をくり返してきた七五歳のアムルイ・ババが、禁慾（ラマダン）月や二ヶ月後の巡礼（ハッジ）月の最も苛酷な巡り合わせとなる今年、それも辛い陸路での旅を決心した時、聖地で生命が盡きるならそれは神の意志、との覚悟があったし、周囲の者達も黙って納得したのだった。

戦乱・動乱の三十余年も含め、四十年以上カーブルのパシュトゥン系タクシー運転手を束ね、ハザラやタジク他の民族出身者との確執も公正に裁いてきたババへの人々の崇敬の念は深い。ババが巡礼を成就、ハジの称を得て帰国、少々の入院を経て帰宅したのを祝う宴が、この夜だった。

ババの長女の婿イサア（イエス）が客の接待に走り廻る。世界のイサウィ（クリスチャン）にとってこの日が特別の意味をもつことは誰もが識っている。偉大な預言者の一人の生誕を祝う心も胸に、勿論、婿の名に託けて冗談を口にする者もいず、良き日とババの慶びの日の重複を、心にともした灯が増えたように感じていた。

ハジ・アムルイ・ババは微笑みを絶やさない。

註1　坐って弾く手風琴
註2　共鳴弦をもつ撥弦楽器
註3　床屋と楽師の兼業が多い。

●事務局便り

＊九月の福岡アジア文化賞大賞に続き、中村医師が菊池寛賞（日本文学振興会主催）を受賞することになった。文学が対象ではなく、パキスタン・アフガニスタンでの事業に対する評価である。有り難いことであるが、活動三〇周年に加えての二つの受賞で、いくらか祝賀的なムードが漂ったことは否定できない。驚いたのは少なからざる方が、これで現地事業が完了するような印象を持たれていることだった。会報を読まれている方はご承知のように、今年の夏は過去最大規模の洪水に複数回見舞われ、シギの取水口は流出し、カマ第二堰は全壊してしまった。現地では、洪水と渇水のなかで息もつけないような緊迫した作業が続けられ、なんとか復旧にこぎ着けている。もちろん、自然災害だけでなく治安の悪化や村人達の動揺など、次々と起こる困難を乗り越え、それを上回る成果を上げてきたのも事実である。ただ成果を強調することよりも、カシコートの連続堰やカシコートの既存水路の拡張工事を始めとする、将来に向けての様々な課題が控えている。二〇〇三年三月の用水路工事着工から一〇年、会創設三〇周年の節目の年に、私たちにはさらに持続的な支援が求められている。年が明けて二〇一四年になれば、アフガニスタンからの撤退を、米軍やNATO軍は公言している。予測できない事態が待ち受けているとしても、変わりない事業を継続してゆきたい。

中村医師は、菊池寛賞の受賞メッセージに次のように記している。

「「菊池寛」の名前から連想するのが「恩讐の彼方に」です。そこに息づく日本人らしい道義や心情を「文化」と呼ぶならば、私たちの事業もまた、確かに「文化活動」の端くれではありましょう。実に多くの人々が、損得勘定なく直接・間接に関わって、三〇年間、物心両面で事業を支え続けてきました。単に伝統的な水利技術だけでなく、薄れつつある日本人の良心と気力、時流に抗うドン・キホーテの気概を評価されたのであれば、本事業に関わってきた全ての協力者と共に受賞を喜び、今後の励みとしたいと思います。」

ペ村から――――――――♪

事務局の手伝いを始めて二年程になります。作業は多岐に亘っていますが、私は礼状班に入れて頂き先輩方のご指導を受けながら切手の整理、礼状書きなどをしています。現在は中村先生が現地で撮られた写真を整理することもしています。沢山の写真や文章を拝見しますと、先生の様々な思いが想像され、私の小さな手伝いが、次なる活動に多少なりともつながっているかなと感じています。これからも細く、長く、楽しく続けていきたいと思っています。（TK）

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【5刷】1890円

辺境で診る辺境から見る
【3刷】1890円

医者 井戸を掘る　【12刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ダラエ・ヌールへの道
【5刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

アフガン 農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者の物語　甲斐大策

1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る
アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）
1995円

岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　電話03(5210)4000

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2013年12月11日　No.118　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲